報告

フレネ学校見学記
― 生命力ある子どもたち

永倉みゆき
（大学教員）

この3月末に、フレネ教育研究会（代表 結城孝雄）主催の研修旅行に参加し、フランスの教師セレスタン・フレネ（Celestin Freinet）が創始した教育を行っているフレネ学校（l'Ecole Freinet de Vence）を参観してきた。フレネ学校は南フランスのヴァンス郊外にあり、市街地からバスに揺られて着いた学校はピウリエの丘の上で、その周りにはほぼ野生のままの自然が広がっていた。このフレネ研修で学んだことは多く、また考えさせられたことも多かった。

環境を捉え、応える身体

特に印象に残ったことは、子どもと、彼らを囲む環境とのつながり方である。よく環境には〝人・もの・こと〟という要素があるといわれるが、そのどれもが日本の園や学校のそれと少しずつ違っていた。まず真っ先に挙げたいのは、校舎を含めたハード面での環境との関係である。斜面として広がっている野生に近い林の中に少し離れて建つ幼児棟（3～5歳）と低学年（1～3年）・高学年（4～6年）の教室がある棟、そしてフレネ学校のシンボルでもあるパパフレネの木（樫の大木）のある広い庭、円形劇場のような場（ここでも低学年クラスが発表の授業を行っていた）、その他にも、飼育小屋や、ランチルーム、畑など多様な場があるのだが、これ

永倉みゆき（ながくら みゆき）
静岡県立大学短期大学部こども学科教授。

らの環境 ―場と場の関係― を、子どもたちは〝身体〟ごと熟知しており、必要に応じて場を選び、学びや遊びに興じていた。これは、相当それらの場を使い込む経験がなければできないことである。私たちが参加した2日の間、石を積んで造られた円形劇場でフルスピードで追いかけっこをしたり、林の間に水を流そうとさまざまな道具で掘り返したり、高い場所によじ登ったり（木でも石柱でも）する姿を目にしたが、1回もつまずいたり転んだりする子を見なかった。おそらく、パパフレネの木に登る際のルール「自力で登ることができる子だけ登ってよい」が示すように、自分から興味をもち、かかわることを決めたことには、全身全霊でかかわってきた経験の蓄積が、そのような〝身体〟を育てたのではないかと思う。これは、多様な環境を経験する機会が少なく、また経験が足りないとなれば与えようとする日本の教育の一番弱い部分ではないかと感じた。

▲林の間に水を流そうとしている子どもたち。

生活の中に置かれた学び

生活と学び、生活と遊びの関係も興味深かった。幼児クラスでは、ちょうど誕生会があり、そのためのケーキを作って焼いていたのだが、部屋の一角で、やりたい子から手を洗うくらいの身支度で、バナナを切り、ケーキ種をこねていた。すぐ横では絵を描いている子もいる。クッキングという構えたものではなく、生活の中にある食、その自然さが心地よかった。子ども一人ひとりの時間の中にいろいろな活動が選ばれ、配置されて一日が出来上がっていき、それが生活となっていく。「もう、遊んできていい？」と問う声のない教育がそこにはあった。

選び出すということ

どの部屋にも活動計画表（plan de travail）

があり、幼児教室の黒板にもあった。子どもたちは自分でやることを決めて一日をスタートさせ、やり終えた項目には印を書き込んでいく。この日も誕生会のケーキ作りに参加した子は、その項目を指でたどって探し、印を入れていた。今日何をやろうかという計画は自分の内にあり、誰がどのように取り組んでいるのかは一目瞭然である。そしてその中にはフレネ教育が重視している「自由テキスト・自由作文」のための印刷の活動もあり、部屋の一角では、印刷機で自分が〝選んだ〟言葉を印刷している子どもの姿があった。パソコンが一般的になった今日、言葉が活字になる喜びは随分薄れてしまったが、この部屋にはまだ、自分から生まれた言葉が印字される瞬間の感動が生きている。この〝選ぶ〟という行為によって光が当たることで、日常に埋もれていたものが俄然輝きだすのではないかと、印字されたものを晴れ晴れとした顔で見る子どもを見てそう思った。

▲自分が選んだ言葉を印刷。

語る身体・聞く身体

どの年齢のクラスでも、輪になって語りあうサークル対話をやっており、教師も輪の一員となっていた。今日の活動などについてのこの語り合いはフレネ教育の特徴のひとつでもあるが、その姿勢から、自分はこの生活をつくることに参加しているんだという意識が伝わってきた。この他にも2週間に1度、全校生による「大集会」が開かれ、同じように生活についての話し合いがもたれる。「意見を述べること」「意見を聞くこと」が根本にある生活である。

またこの日ちょうど幼児クラスで「コンフェランス」があり、母親が外科医である男の子の「心臓」についての発表を聞くことができた。コンフェランスとは、自分の興味ある題材について親と一緒にまとめ、先生の前で練習して許可

がもらえたら発表できる「自由研究発表」である。かなり高度な発表を、理解が難しくても静かに聞く子どもたち、また聞かせる教育の姿。「幼児期にふさわしい学び」とはどのようなことなのか、もう一度考えてみる必要を感じた。

文化の違い ―大人と子どもの段差

2日間の参観で、大人の子どもとの向き合い方が日本とは随分違っていることも感じた。先生はあくまでも大人であり、そのつながりは深くても子どもの世界に入っていくことはしない。先ほどのサークル対話においても、先生は輪の一員として発言するが、あくまでも大人の立場から発言し、子どもたちはその段差については受け入れているようだった。話し合いのときに誰かがつられて話しだすと先生に「シーッ」と何度も制止されたことは意外でもあった。日本であれば、そのつぶやきを拾って発言につなげるように促すのであろうが、その場にあるルールについては、自由な雰囲気と裏腹に、厳しく守られていた。年齢に関係なく、話す人の権利を守る意識をもたせるためであろうか、年長になるにつれ次第に身につけるという日本の「子どもの育ちに応じた」注意をするやり方とはまた違った意識の育て方がそこにはあった。また、幼児クラスでも、日本の保育では基本である「大人が子どもの遊びに加わって一緒に活動する」ということはない。フレネ学校では、先生が一緒に活動しない代わりに、子ども同士のかかわりが大変深く、先生がいない場でも安全が守られているのは、上級生がごく自然に年下の子を見守っているからであろう。また子どもたちは先生から用事を頼まれると大変誇らしそうに行動していた。「自由」さは確かにあるのだが、フレネ学校にある自由とわれわれが日本の保育に見る自由とは同じようでいてどこか違っていた。「大人と子どもの関係」「文化の違い」「生活のもつ意味」、そしてそれを伝えるための「保育の方法」等々、たくさんの宿題をもらえた今回の旅に感謝したい。